

Title	<書評> Gilbert Harman and Judith Jarvis Thomson, "Moral Relativism And Moral Objectivity", Blacwell, 1996
Author(s)	明石, 卓也
Citation	年報人間科学. 19 P.298-P.302
Issue Date	1998
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/3716">https://doi.org/10.18910/3716</a>
DOI	10.18910/3716
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Gilbert Harman and Judith Jarvis Thomson

*Moral Relativism And Moral Objectivity*

Blacwell, 1996

明石卓也

本書はErnest Sosa編集によるGreat Debates in Philosophyという叢書の一環として出版された。標題の示すように、ギルバート・ハーマンが「道徳的相対主義」、ジュディス・J・トムソンが「道徳的客観主義」の立場をコンパクトに概説しており、メタ倫理学への入門書の色合いが強い著作である。著者について簡単に紹介しておく、ハーマンは現在プリンストン大学の哲学教授であるが、かつて大学院でW・V・クワインに師事し、分析哲学全般にわたって考察を重ね、「思考」などにその成果をまとめている。倫理学に対しては一貫して相対主義の立場を取り、B・ウィリアムズやD・ライオンズと論争を繰り広げている。トムソンはマサチューセッツ工科大学の哲学教授で、『行為とその他の出来事』などの著作を著している。また「権利と死」などバイオエシックス関係のすぐれた論文も公表しており、アメリカの倫理学界において重要な人物となっている。本書は四章から構成されており、一、二章で互いの立場の説明、三、四章ではそれぞれ相手側の立場に対する短い批判的考察が行われる。

第一章において、ハーマンは道徳的相対主義を説明している。「唯一真であるような道徳が存在するか」という問いに対して、二つの異なった主義からの回答が可能である。「道徳的絶対主義」によれば、唯一真である道徳が存在し、もしある行為に対して異なった道徳的判断が提出されている場合、少なくともどちらかの判断は誤っているとみなされる。他方、「道徳的ニヒリズム」によれば、真であるような道徳はひとつも存在せず、それゆえ道徳の有効性自体が

疑わしいものとされる。道徳的ニヒリズムを容認することは、反社会的行為を容認することである。ハーマンは道徳的絶対主義と道徳的ニヒリズムの両方を否定する。ハーマンの支持する道徳的相対主義が位置するのは、いわば両者の中間点である。

ハーマンは、現実社会における道徳観の多様性を説明できないとして道徳的絶対主義を批判する。現代社会を見渡してみても、たとえば食肉や妊娠中絶といった行為の是非、あるいは脳死の判定に対してなど、様々な対立する道徳観が同じ社会に併存している。道徳的相対主義者によれば、これらの対立の根は、本人が置かれている状況や非道徳的事実に関する信念の相違というより、むしろ両者の道徳観の根本的な相違に由来する。また、道徳が相対的なものでしかないのならば道徳は効力を持たない、という道徳的ニヒリズムの主張に対しては、道徳的相対主義者は、道徳は慣習的な効力を持つと反論する。ハーマンによれば、道徳的対立は客観的事実に関する対立というよりは、感情的な対立であり、ガレーシセルである品物を高く売ろうとしている人と安く買おうとしている人の意見の対立に似ている。そのような対立が解消されるのは、両者の交渉 (bargaining) によってである。交渉の結果は、証拠としてあげられる客観的事実よりも、交渉を行う本人の力関係に依存する。そして、道徳は、継続的な道徳的交渉と調整によって形成される慣習であるとみなされる。いったん、道徳的慣習が形成されると、それを修正することは難しくなり、道徳的慣習は規範としての効力を獲得する。

さて、ハーマンは次のテーゼを道徳的相対主義の第一次近似としてあげる。

「ある道徳的判断に真理条件を与えるためには、SがDすることは道徳的に悪い、という形の判断は、道徳的枠組みMに関して、SがDすることは道徳的に悪いの省略形として理解されなければならない。他の道徳的判断についても同様である。」

しかし、道徳的相対主義の第一次近似テーゼを認め、道徳的判断は、それぞれの道徳的枠組みに相対的でしかないとすると、かなり極端な相対主義を取らざるをえないように思われる。われわれの道徳的判断が常に「われわれの枠組みにとって」のものでしかないならば、道徳的相対主義者は自分とは異なる枠組みを持つ人々の道徳的判断に対して何も言えなくなってしまう。道徳的相対主義者にはえられた課題は、相対主義を取りつつ、いかに異なる枠組みを持つ人々に対して、道徳的態度の不一致を表明できるかである。

ハーマンは、「準絶対主義 (quasi-absolutism)」を援用することであり、この課題を解決しようとする。準絶対主義は、情動主義の一種であり、ハーマンはこれを「投影主義 (projectivism)」あるいは「準實在論 (quasi-realism)」と呼んでいる。準絶対主義によれば、道徳的相対主義者は自身の道徳的枠組みを世界に投影させ、あたかもその投影された道徳が唯一真である道徳であるかのように、道徳用語を使用することができるが、一方で彼／彼女はそれが「あたかも」にすぎないことを承知している。ハーマンは、準絶対主義で使われる道徳用語をQA terminologyと呼ぶ。たとえば、この用語

法においては、通常の「悪い (wrong)」と区別するために「ワルイ (WRONG)」が使用される。通常の「悪い」が使われる場面では「ワルイ」を常に使用することができるし、またQA terminologyは論理学の法則に従うのである。

QA terminologyを使用することで表現されるのは、欲求、直観的判断、マクロな目標などが組み合わさったある価値基準（＝道徳的枠組み）に対する話者の態度である。ジョンが「食肉はワルイ」と言ったとき表現されているのは、食肉を認めているような価値基準に自分は賛成できないという彼の態度である。

また、準絶対主義を認めることによって、相対主義者は絶対主義者と同じように、道徳文に「客観的な」真理値を割り振ることができるとハーマンは考える。しかし、その真理値は、あくまである道徳的枠組み内での道徳的事実によって決定されるものであり、異なる道徳的枠組みに対しては決定されない。そして、運動に対して唯一客観的な正しい記述を与えることのできる時空間に対する枠組みが存在しないように、相対的道徳的枠組みのどれかに特権的地位が与えられることは、ありえない。互いに異なる道徳観を持つ道徳的相対主義者は、QA terminologyを使用することで互いの道徳的態度の不一致を表明し、そして彼らの道徳的態度における対立を解消することができる。だが道徳的対立はあくまで、道徳的交渉によって解決されるべきもので、唯一客観的に特権的地位を与えられた道徳的枠組みによって解決されるべき類のものではないとハーマンは主張する。

第二章では、トムソンは道徳的客観主義を主張する。われわれは日常において「中絶は悪い」だとか「死刑制度は不当である」などの道徳文を主張し、時にはその真理値を見極めようとする。トムソンはそのような行為を、「道徳的査定 (Moral Assessment)」と呼ぶ。しかし、もし真である道徳文がひとつも存在しなければ、道徳的査定は無意味な行為になってしまう。道徳性が「客観的」であるということは、道徳的査定が無意味でないこと、つまり真である道徳文が存在し、われわれがそれを確かめることができることであるとトムソンは考える。

トムソンは、二つの文の種類を区別する。ひとつは、「評価文 (evaluatives)」であり、何かがある面において良いこと、悪いこと、より良いことを表現する文である。もうひとつは、「指令文 (directives)」であり、ある人が何かをなすべきである、なさなければならぬ、なす義務があることなどを表現する文である。彼女は、道徳的な評価文と指令文が、非道徳的な事実を表す文に還元できることを示そうとする。

まず、評価文から見ていくと、トムソンは良いことを五つのサブクラスへと分類する。五つのサブクラスとは、有用であること (the useful)、「能力のあること (the skillful)」、「快適であること (the enjoyable)」、「有益であること (the beneficial)」、「道徳的に良いこと (the morally good)」である。四つ目までは、非道徳的な意味での良いことであるが、これらに関する判断は価値判断である。トムソンは、それらを事実判断に還元しようとする。たとえば、有

用であることは次のように定義される。「Xをするために有用であるということは、Xをする時に人が典型的に持っている欲求を満足させるやり方で、Xをすることを容易にするということである。」つまり、有用であることは行為者の欲求に関わっている。同様に、能力のあること、快適であること、有益であることも事実判断を表す文に還元される。

道徳的に良いということも、すべての良い同様に、ある面において道徳的に良いのであって、具体的には、寛大 (generous) であったり、勇敢 (brave) であったり、公正 (just) であったりする。道徳的に良いことは、他の四つの非道徳的な良いことから構成される。トムソンは行為における、寛大さ、勇敢さ、公正さを他の非道徳的な良いことから説明する。たとえば、寛大さは有益であることと関連している。「ある行為が寛大であるとは、行為者がその行為が他人に対して有益であると信じてその行為を行っていることである」このように、すべての道徳的に良いことは、他の四つの非道徳的な良いことを媒介することによって、事実判断に還元される。

次に「Xがalphaすることを道徳が要求する」という形式の文を、道徳的要求文と呼ぶ。指令文にとって、道徳的要求文は基本的な働きを担っている。つまり、道徳が主体に行為を要求することがなければ、指令文は真とはなり得ない。(1)「アリスはバナナを食べるべきである」という指令文は、道徳がアリスにバナナを食べることを要求しない限り、偽である。問題があるとすれば、(1)は、(1c)「アリスがバナナを食べることを道徳は要求する」という定言

命令と解釈することもできるし、(1b)「バナナを食べることによってアリスの欲求がもっとも効果的に充足される」という仮言命令と解釈することもできる点にある。トムソンは、基本的には、(1)は(1c)に解釈されるべきであると考えている。というのは、たとえば殺人趣味のある男が、ナイフで人を殺すことに最高の欲求の充足を感じるとしたら、「私はナイフで人を殺すべきである」という指令文が導き出されてしまうからである。したがって、指令文は、基本的には道徳的要求文と解釈されるべきである。

さて道徳的要求文が真となるのはどのような条件の下であろうか。トムソンは直観的に、道徳がわれわれに要求するものは、それをやり損なうことが道徳的に悪いようなものであると考える。トムソンは次の道徳的要求にテーゼを主張する。「ある人がそれをやらないでおく道徳的に悪い」といえば狭量 (mean) である、臆病 (coward) である、不公平 (unjust) であるなど一時にのみ、その人はそれをなすことを道徳的に要求される。」

以上のように、トムソンは道徳的な評価文も指令文も、非道徳的事実を表す文に還元できると考える。もちろん、彼女自身が言っているように簡単な素描が示されただけであり、還元にあつた問題もいくつか未解決なまま残されていることは彼女も認めている。しかし、トムソンは、少なくともいくつかの文は客観的に真であり、道徳は客観的でありうると主張する。

本書の特色は、二人の著者が互いに批判を述べあっていることである。だが残念ながら、両者の論点がかみ合っているとは言えず、

この特色が十分に活かされているとは思えない。その原因は、ハーマンの道徳的相対主義の自然主義的性格をトムソンが正しく理解していないためだと思われる。トムソンは、ハーマンの道徳的相対主義は、道徳の客観性を脅かす主張だと受け止めている。だが、ハーマンは、話者の欲求、直観的判断、マクロな目標などから構成される価値基準に照らし合わせることで、道徳的判断の客観的な真理値を決定することができると言っている。「食肉はワルイ」は、ベジタリアンの欲求や直観的判断などの道徳的事実に照らし合わせれば客観的に真である。その意味で道徳的相対主義者は道徳の「客観性」を認めており、道徳が客観的であるかどうかという点に関しては、必ずしもトムソンの主張する道徳的客観主義と対立していない。

ハーマンとトムソンが対立しているのは、むしろ、道徳的判断の客観性を保証する道徳的事実が唯一のものか、あるいは道徳的枠組みに相対的なものかという点である。したがって両者の主張が抱えている課題は以下のようなになる。トムソンの場合、ハーマンが批判しているように、道徳的な文が最終的に還元される欲求や有益さといった概念や還元のプロセスにおけるそれらの優先順位が相対的でないことを示さねばならないだろう。そうでなければ、トムソンの言う客観性は、まさしくハーマンの言う枠組みに相対的な客観性でしかあり得なくなってしまう。ハーマンについては、すべての道徳的判断の対立が、異なる道徳的枠組みを持つことによるならば、対立する道徳的判断の数だけ異なる大小の道徳的枠組みが存在することになり、かなり極端な相対主義を取らざるをえないことになってしま

う。道徳的絶対主義を取ることなく、道徳の自立性を守るためには、道徳的枠組みとはいかなるものかをさらに詳しく説明することが必要であろう。ハーマンは、運動に対する時空間の枠組みとのアナロジーによって、道徳的枠組みのイメージを与えようとしているが、十分な説明がなされているとは思えない。評者としては、今後も継続されていくであろう議論の成り行きに注目したい。